

口クでなし決闘講師の転生遊戯記

in door fish

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公：流城 流真（るじょう るま） 21歳

デツキ：EXデツキをあまり使わないもの、たまにメタる、基本墮天使、たまに裏切りあり（デツキで）

性格：おとぼけ、ドジ、マイペース

今回からまた新しくスタートして原作5d、sで物語を作りたいと思いました。

残り二つはたまーに投票できたらいいと思います。
あとプレイイングは納得できないものがあつたり、動画に出ているやつと似ているじゃないか!!と思われるものがあつたりしますがどうかたたかいでください。

ガチデツキなどそういうデツキを出して欲しいやらちゃんとした決闘が見たいんじゃ!!という人はこの小説以外のものを見てください。

この小説以上にいいものは星の数ほどあるので。

デツキはエクシーズ程々に、ベンデュラム程々にリンクなしでやって行きたいと思います。

とてもテンプレな表現ですがよろしくお願ひします

目 次

- | | |
|------------------|----|
| 一点：俺アカデミアの講師なの!? | 前編 |
| 二点：俺アカデミアの講師なの!? | 後編 |
| 三点：入学式の当日に | |
| 四点：口クでもない授業 | |
| 五点：以外にピンチかもよ？ | |

14 12 9 4 1

一点：俺アカデミアの講師なの！？ 前編

？ 「じゃあ、おやすみ！」

？ 「おやすみさい。」

？ 「さあ寝よ。」

どうも今とてつもなく眠たい流域 流真（るじょう るま）です。
なに？ 苗字と名前の最初が一緒？ そこは俺も気にしてるから気に
しないでほしい。

さて、今スマホで曲を聴いて寝ようとしているところだ。
じやおやすみなさい。

流真「ふあああ、よく寝たや。」

みなさんおはよう sun 流真です。

今日からある高校の講師として授業を教えるために着たことのな
いスーツを着て頑張って免許を取った車で期待を胸に乗せ学校に行
くために今ベットから降りた。

流真「まず服を持つてと… ああ久しぶりにあいつと遊戯王して

」
流真是そう呟きながらドアを開け、階段を下りた。

流真「母さんおはよう。」

？ 「あら？ 今日は早いのね？」

俺の母さんの名前は流域 流実（るじょう るみ）つて母さんの名
前も苗字と一緒にないかい!! とツッコンでしまうと思うが気にする
な。

流真「当たり前じやん、今日は○○高校の講師だぞ？ かなり楽しみ
にしてんだから。」

流実「何寝ぼけた事言つてんの？ 今日からデュエル・アカデミアの
講師採用試験に行くんでしよう？」

流真「はい？ え？ そうだつけ？」

あるええええええええ！ え！ ナンデ！ そんな！ デツキトツプ確定し

てるのにデツキトップが違うかった事と同じくらいビックリだわ!!
まあそんな事ないよ。夢だよ夢。

もう一回ベットで寝たら元に戻つていると思う。

流真「ちょっと待つて、時間あるならちよつと寝てくる。」

流実「ちよつとだけだから早く起きなさいよ。試験は8時半つて書いてあるから。」

流真是駆け足で自分の部屋に戻つた。

流真「よし寝よう。じやあおやすみなさいー」

30分後

流実「流真早く起きなさい。時間になるよ。」

流真「ん……今日は○○高校の講師をしに行くんだよね?」

流実「いつまで言つてるの?デュエル・アカデミアの講師試験を受けに行くんでしょう?」

早く起きなさい!」

流真「はあーい……」

もうわかりましたよ……行きますよデュエル・アカデミアに……
てかデツキもいるじやん多分。

流真「はああ今日は大変そう……」

?「何言つてんのお兄?」

流真「流奈にはわからないよ。」

このチビの名前は流域 流奈(るじょう るな)つてまた一緒じやんつてもうわかりましたよ。気にしませんよ。

流奈「ちゃんとしてよお兄、私もアカデミアの試験なんだから。」

流真「はい?まじですか?」

もうなんですかここは僕を元の世界に返してください。

遊戯王したいつて言つたけど誰もデュエル脳になりたいとは言つてません……

流真「ゴシゴシ(はあなんでこんな疲れるんだ……)」

? 「ほら!! ちゃんと気合を入れろ!! だらしないぞ。」

流真 「いで、わがつだからたたくな!!

わかつたから向こう行つてくれ、父さん。」

? 「おうわかつた!!」

流真 「いて!! 叩く必要ないじゃないか!! もう…」

あの人叩きマシーンは俺の父流城 流羅（るじょう るら）俺の家

族みんな最初は一緒だよ…

流真 「はあ… じゃあ準備もできたし、行くか。」

流奈 「私も後で行くからお兄頑張つてね」

流真 「はいはい頑張りますよ。

じゃあ行つてきます。」

二点：俺アカデミアの講師なの！？ 後編

流真「じゃあ行つてきます。」

流真是その言葉を残して家を出た。

一方デュエル・アカデミアでは

？「今日は期待の新人が探せるといいね～」

？「そうですね！」

あと、新しい講師の先生も試験を受けるので楽しみです！」

？「まあその講師は私がボコボコにしますから大丈夫です!!」

？「あ、いや、そんなつもりで言つたわけでは……」

流真是、今新幹線に乗つてアカデミアに向かつている。
その中で、試験に使うデツキを選んでいるみたいだ。

流真「はあああ、なんでこんな目に俺は普通に……「ちょっとといいか
しら？」って何？」

？「あら、ごめんなさい。ここら辺席が空いてないから、あなたの
隣しか空いていないから声をかけたのだけど……お邪魔だつたかし
ら？」

流真「ああ、いや、大丈夫大丈夫。

隣に誰が座つても気にしないから。ちょっと今取り込み中だから
あまり話しかけないでほしいんだけど……」

？「そう……うん？これは、アカデミアの紋章じや？」

流真「ああ、今日アカデミアに講師の試験を受けに行くんだよ……
ほんと大変だよ。」

？「なんで講師になるために行くのにそんなにしんどそうなのよ
？」

知らない女の人が流真をジト目で見て いる。

流真「まあ今日行けば入学式まで日があるからゆっくりできるは
ず……」

？「なんで受かるつてわかつてんのよ？」

アカデミアの講師試験ってかなり難しいのよ?」

流真「まあ筆記がないし、決闘だけだから大丈夫。

あと、俺はかうなり強い。」

流真是、右腕を思いつきり上にあげ無邪気な子どものように言った。

? 「まあ頑張りなさい。受かるといいわね。」

そう言つて女のは、外に出て行つた。

流真「さてデツキは何にしようかなーって待つてやばい!!
降りないと!!」

流真是急いで新幹線から降りた。

だが、流真是この時バックから手に取つたデツキは予想もしない
デツキだつた。

よーっす!みんな流真だ。つて知つてるか。俺は今とてつもなく
走つて いる。

とても走つて いる。もうしんどい…

デツキケースなんかもつてくるんじやなかつたこのヤロウ泣

今回は実技だから速攻で終わらせて帰りたい。
つとこでもうついたや、じやあみんなまた後で!

流真「すみません、講師試験を受ける流域 流真ですが…」

受付員「はい、では試験の準備をして待つていてください。」

流真「ありがとうございます!!」

会場の中

受験生1 「[召喚僧サモンプリースト] でダイレクトアタック!!」

受験生2 「うわああああああ

受験生1 「よつしや!!」

流真「サモプリでダイレクトする人初めて見たわ…」

流真の試験は来てから30分後だつた。

流真「今日はお願ひします。」

? 「フフフフ、あなたが講師になる方ですか？」

流真「まあそういうことになりますね。はい。」

? 「私の名前は山口 由伸（やまぐち よしのぶ）といいます。
あなたみたいな、だらしない人が講師になるのには100年、いや
1000年早いでしよう！」

流真「はあああ、なんかキャラが濃いの出てきたよ～」

山口「なんですよ!!!!
いいでしよう！あなた負けたらネオ童実野シティから出て行きな
さい!!!」

周りが騒ぎ出した。うるさいな。こんな権限もなきそうな教師に
何が出来るつて言うんだよ。

流真「いいぜ。ボツコボコにしてやる。」

山口「自分が言つたことに後悔するといい!!」

二人「決闘!!」

※決闘の表し方

例：流真 L2300 H3 モンスターゾーン：○○――
伏せゾーン：○○――

(行が変わつて変になつたら変えます。)

山口「あなたからやらしてあげます。」

流真「それは丁寧にどうも。ドロー。はい!?（まさかヘルテントー
チ……）これ先行に動くものじゃないよ）俺は、ターン終了。」

流真 L4000 H6 モンスターゾーン：――――
伏せゾーン：――――

山口「あ、あなた!!! やる気があるのですか!!!!」

流真「ああ、大真面目だ。だから早くしてくれ。」

山口「ムキ————！その態度握りつぶしてやるわ！ドロー！」

私は、「切り込み隊長」を通常召喚！！そして効果発動！！

手札より「切り込み隊長」を攻撃表示で特殊召喚！！

これで切り込みロック完成!!バトルフェイズ!!

「切り込み隊長」で攻撃!!切り込みスマッシュ!!

流真「俺は、手札より「速攻のかかし」の効果発動。

このカードは相手の直接宣言時手札から捨てすることで、その攻撃を

無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

山口「ムキー！だらしない人間にしてはやる。

カードを伏せてターン終了。」

山口 L40000 H3 モンスターゾーン：—○○—／「切り

込み隊長」「切り込み隊長」>

伏せゾーン：—○—

流真「俺のターン、ドロー。手札より「手札断殺」を発動。
互いに2枚墓地に送り、デッキから2枚引く。」

山口「手札交換とは、よほど手札が弱かつたと見る。」

流真「勝手に見とけ、俺は「ブラックホール」を発動。
場のモンスターを破壊する。」

山口「つな！！そんな…」

流真「そして「サイクロン」を発動してそこに伏せてあるカードを
破壊する。」

さらに、「死者蘇生」を発動!!墓地から「紅蓮魔獣、ダ・イーザ」を特
殊召喚。

このカードの攻撃力は除外されているカードの枚数×400上が
る。」

山口「あなた馬鹿なのですか？除外なんてされてないじゃないですか？」

流真「まあ見ときな手札より相手の場に「トーチ・ゴーレム」を特
殊召喚。」

そして俺の場に「トーチトーチン」を2体特殊召喚する。

バトルフェイズ、「トーチトーケン」で「トーチゴーレム」に攻撃!!

山口「バカが!!こつちの攻撃力は3000、そつちの攻撃力は0自爆特攻をしているだけ!!」

流真 L1000

流真「3000以上のダメージをくらった時、手札から「ヘル・テンペスト」を発動!互いの墓地、デッキのモンスターを全て除外する。俺はデッキから21体のモンスターを除外する。そしてここで「紅蓮魔獣ダ・イーザ」の攻撃力も変わる。」

山口「攻撃力は⋮⋮」

流真「そう、8400だ。「トーチゴーレム」に攻撃!!」

山口「うああああああああ

山口 L0

流真「ふうう、これでいいだろ?」

山口「つはいいいい!!!!もう帰つてもらつて結構です!!!!!!」

そしてすみませんでした!!!!」

山口は走つて会場から出ていった。

流真「はああああ、今日は帰る。」

三点：入学式の当日に

あれから2週間

流真「あああああ、やつぱりかい……」

はあ、おいつすー！あれ？元気が足りないぞ？
つてため息ついている俺に言われたくないか……

今俺、流域流真はアカデミアの合格通知と睨めっこしている。
まあ、何かといつてこの世界には慣れつつあるから大丈夫。

この間なんて、カードショップに行つたよ。そしたらステイーラー
が5円つて大丈夫かい？つて思つたけど丁度いいから10枚程度
買つたよ。なら店員がすごい目で見てたな。

まあ今日は入学式だから、流奈を車に乗せて行こうかなと思う。
え？Dホイールで行かない？乗つてもいいけど身体が赤く染まつ
ていくことになるから行かない。

流奈「お兄!!!早くしてつて言つてるじやん!!」

流真「はいはい、分かつたからちょっと待つてろ。」

はあ、妹つていうのはこんなせつかちなのが多いのか？
もうちよつと可愛げがあるものかと思つていたが……

流真「行つてきまーす。」

流奈「お母さん行つてくるね!!」

流真は赤色の車に流奈を乗せて車庫を出た。

流真「学校つて楽しみか？」

流奈「当たり前じやん!!楽しみにしすぎて爆発しそうだよ!!」

流真「お、おう、そうか……」

流真是ちよつと引き気味に流奈の話を聞いていた。

流真「着いたぞ、流奈。つて寝てんじやん。おーい起きろよ」

流奈「ん……ん、あ、お兄もう着いた？」

流真「着いてなかつたら起こしてないわ。いいから早く行かないと

生徒は8時45分集合だろ？」

流奈「あ、そうだつた!! 今何時?」

流真「今は、8時30分だぞ。」

流奈「丁度いい時間だね!! ジやあ行つてくるね!!」

流奈は勢いよく車のドアを閉めて助手席から降りて校舎に走つて行つた。

流真「はあ……あんだけ元気に相手されたら年の差を感じるよ……」

流真は車の中でご飯を食べてから職員室に向かつた。

校長「えー、これから新しい環境に迎えられる新一年生は、たくさん楽しいこともあり苦しいこともあるかもしれません。」

ですが、それを乗り越え我慢して自分のこれから的人生へ繋げれるよう頑張つてください。以上で校長式辞とさせて頂きます。」

はあ～校長ある意味いいこと言つてるけどみんな寝てんだよな。

後ろの席のやつらに関しては頭がすごいことになつてる……首痛くなるぞあれ

なんやかんやありながらも入学式は幕を閉じた。

? 「はい皆さん、こんにちは! 副担任の松本 有希(まつもと ゆき)です!!」

生徒「先生ー!」

有希「どうしましたか?」

生徒「このクラスの担任の先生はどこですか?」

有希「あ、では登場してもらいましょう! 流城 流真先生です!」

流真「はいみんなこんにちは!」

生徒勢「こんにちは!!!」

流真「元気があつてよろしい。じゃああとは松本先生よろしくー」
流真はそう言つて教卓で寝だした。

有希「え、ちよつと、先生!? 冗談はよしてください!!」

生徒勢「・・・（こいつ大丈夫かな）」
有希「だれか助けて／＼＼＼＼泣」

四点：口クでもない授業

よーっす！流真だ！！

入学式から1週間は経つただろうか今は4時間目でお腹が空いたから寝ておる。

だつて眠いものは眠い。まあクラスのみんなには文句ばつか言われてるけど教えるのしんどいからやつてない。

生徒1 「先生、また自習つて書いてんじやん。」

生徒2 「しようがないよ。元がこれだから。」

流真 「おい、お前らーなんなら机決闘でもしてていいぞー」

生徒1 「おい!!お前ほんとにやる気あんのか!!」

一人の生徒一柳 柳太朗(いやなぎ りゆうたろう)が怒鳴った。それもそのはず流真はまともな授業はもつてのほか授業を全部自習と言つて投げ出しているのだから。

流真 「ん？なんだよ？眠いから起こすな。」

柳太朗 「なにが眠いからだ！教師だつたらちゃんと授業くらいしろや！」

それかまともに授業すらできないのか？」

生徒が流真の胸ぐらを掴んでいる。

生徒が睨んでいるのに対し、流真是少しにやけて生徒を見ている。

流真「じゃあ聞くけどなんでそんなにデュエルモンスターズについて知りたいんだ？」

柳太朗「決まつてるだろ!!世界チャンピオンになつてやるからだ！」

生徒が拳を握りながらそう言つた。

流真「悪いけど君には向いてない。」

流真の発言に教室のみんなが唖然とする。

柳太朗「つな!!ふざけるのもいい加減にしろ!!!」

生徒が机を蹴り倒し流真の前に立つた。

流真「なんだ？言われて腹が立つたからこうやつてしてるんだろ？」

柳太朗「もういい!!デユエルだ!!お前なんかボコボコにしてやる!!」

柳太朗がそう言つた瞬間、教室にはざわめきとチャイムの音が鳴り響いた。

流奈「あ!!お兄!!」

流奈は廊下で歩いている流真を見つけた。

流奈「ちょっとお兄聞いたよ。授業してないんだって?」

流真「ねみいからやつてない。あとめんどくさい。」

だつて教科書わかりにくいし、教える気無くすもん。

せめてわかりやすい教科書と資料集とかあればもつといいのにと

俺は思う。

流奈「みんなお兄のこと裏で叩きまくつてるよ?

ダメ教師だとかあいつはすぐにクビとか」

流真「まあそのうちわかるさ、この世界（ゲーム）のしんどさが。じやあな、俺も仕事があるから、後、明後日決闘する事になつたら、一柳つてやつと」

流奈「それつて学年上位にいる子じやない?

テストも優秀で決闘の腕もいいつて聞いたことあるもん」

流真「ふーん、だつたらいいや。」

流奈「何がいいの?」

流真「この世界の厳しさを教えてやるよ。」

そう、堕ちたものたちの恐怖を全員に教えてやるよ

五点：以外にピンチかもよ？

翌日

よーつす！流真だ！

今何をしているかと言うと四方八方からヒソヒソ話が聞こえるね
なんでかと言うと昨日俺の授業に気に入らないって一柳 柳太郎
君が怒つてなんか決闘することになりやした！

つてふざけてる場合でもないんだよね～この決闘なんか俺の生存
権もかかってるからちよつとは眞面目にしたほうがいいと思われる。
なんせ校長その他諸々アリーナの中には全学年が見にきてるから
ね

大丈夫かな？1時間目と2時間目を潰してまでこんな事して
つてなわけで頑張りますか！

流真「おゝ、みんな怖いね～めちゃくちゃ睨まれてる」

柳太郎「当たり前だろ？てかもう学園を去るやつに励ましの言葉な
ぞないぞ？」

流真「そりゃ怖いな～いつちよ頑張るか」

柳太郎「精々あがけ没落教師」

二人「決闘!!」

柳太郎「こっちから貰うぜ！ドロー！」

生徒1「一柳君頑張つて!!」

生徒2「あんな教師やつつけてしまえー!!」

柳太郎「俺は、魔法カード「手札抹殺」を発動!!
俺は5枚捨て5枚ドロー!!」

流真も「手札抹殺」の効果で5枚捨て5枚ドローをしたが顔色が悪
くなつた。

流真「げ……この手札はヤバイな」

柳太郎「ふん！手札事故か！程度が知れるデツキを作ったもんだ」

流真「まあ、大丈夫な気がする」

柳太郎「その余裕がいつまで続くかだな!!」

俺は、レベル1の「森の聖獣 ユニフォリア」を手札から墓地へ送

り「虚栄の大猿」の効果を発動する!!
こいつは墓地へ送ったモンスターのレベル分減らしたり増やしたりする!!

俺はこいつのレベルを4にする!!

さらに魔法カード「ワン・フォー・ワン」を発動!!

手札から「グローアップ・バルブ」を墓地へ送り「森の聖獣 ユニフォリア」を特殊召喚!!

レベル1「森の聖獣 ユニフォリア」にレベル4になつた「虚栄の大猿」をチユーニング!!

生徒1「くるよ!!一柳君の切り札が!!」

流真「(レベル5つて何かいたつけ?あくカタストルか?)」

柳太郎「現れる!「ナチュル・ビースト」!!」

柳太郎が出してきたのは、魔法カードの発動を許さないモンスター「ナチュル・ビースト」だった。

もちろんデッキコストで2枚墓地へ送ることになつてているが手札5枚から発動される魔法はあっても5枚、10枚の消費で相手の動きを封じることが出来る。

流真「ありやりや、想像してたのより酷いのが出てきた。」

柳太郎「まだまだ!!

俺はデッキトップを墓地に送り「グローアップ・バルブ」を特殊召喚する!!」

流真「うーん(これバルキオン来るやつじゃないか?: けどビーストを使わなければいけないが、どうするんだ?)」

柳太郎「レベル5の「ナチュル・ビースト」にレベル1「グローアップ・バルブ」をチユーニング!!出でよ「ナチュル・バルキオン」!!」

流真「いいのか?ビーストを置いておいたほうが良かつたんじゃないか?」

柳太郎「頭が固いなうこうするんだよ!!

魔法カード「死者蘇生」を発動!!対象は「ナチュル・ビースト」だ!!

墓地から「ナチュル・ビースト」を特殊召喚!!

柳太郎の場にはデッキトップ2枚を墓地に送つて魔法を無効にする「ナチュル・ビースト」がさらに墓地のカードを2枚除外して罠無効にする「ナチュル・パルキオン」がいる。普通であれば遊戯王をさせてくれない盤面である。

流真「あちやく揃つたか…」

柳太郎「このままターンを終了する（これは突破出来ないだろ…）」

柳太郎 L4000 H0

モンスターゾーン：○○――< 「ナチュル・ビースト」「ナチュル・パルキオン」>

魔法・罠ゾーン：――――

生徒3「いいぞ！一柳!!!

このままあいつをぶっ倒せ―――!!」

生徒1「その調子よ!!!あんなやつ倒してしまえーーー！」

外が盛り上がりつてきたが飛んでくる言葉は流真の批判と柳太郎を応援する声である。応援は良いのだが、知らない人から見たらこの批判の量はイジメだと判断されそうなほどの声量である。

が、言われているのになぜか流真は平氣そうに柳太郎の方を見ている。

流真「さあ行きますか。俺のターン

俺は手札から「堕天使 イシュタム」の効果を発動。

このカードは自身と堕天使カードを捨てて2枚デッキからカードを引くことができる。」

柳太郎「魔法じやないから無効に出来ない…」

流真「俺は、手札から堕天使カードを2枚捨てることで「堕天使マステイマ」の効果を発動…」

柳太郎「またモンスター効果…」

流真「こいつは堕天使カードを2枚捨てることで特殊召喚できるんだ。」

つて事で「堕天使 マステイマ」を特殊召喚。」

柳太郎「攻撃力2600…なんで魔法も使わないでこんなモンスターを…」

流真「まだ続くぞ。

さらに「堕天使 マステイマ」の効果を発動。

1000ライフポイント払い、墓地の堕天使魔法、罠を対象にして発動する。

俺は「堕天使の戒壇」を対象にして発動する。」

流真 L40000—1000||L3000

柳太郎「何するんだよ、手札に戻しても俺の場の「ナチュル・ビースト」で無効にするぜ!!」

流真「この効果で対象にした「堕天使の戒壇」の効果を適用する。」

柳太郎「魔法カードの発動なら無効に！」

流真「残念ながら魔法ではなくモンスター効果として発動するんだ。」

柳太郎「な……」

生徒1「そんなのインチキ効果じゃない!!!」

生徒2「自分のいいように解釈してるだけじゃないの!!!」

流真のモンスター効果に生徒たちが文句を言っているがその中で一人真剣に見ている人物がいる。

そう、流真の妹の流奈だ。

彼女は、兄である流域 流真のデッキを知っているからこそ一柳柳太郎の場面の対処の仕方を流奈は楽しみに見てているのである。

流真「じゃ効果適応するぞ。

「堕天使の戒壇」の効果は墓地の堕天使モンスターを守備表示で特殊召喚する効果を持つていてる。

俺は、墓地に存在する「堕天使 イシュタム」を守備表示で特殊召喚。」

柳太郎「次は守備力2900のモンスター。」

だが、攻撃できるのは1体この場面の突破は難しいだろ！」

流真「俺は1000ライフポイント払い「堕天使 イシュタム」の効果を発動する。」

対象は墓地の「魅惑の堕天使」だ。」

流真 L30000—1000||L2000

柳太郎「次は罠カードの効果を適用か……」

流真「魅惑の墮天使」の効果は相手のモンスターのコントロールをエンドフェイズまで奪うという効果だ。」

柳太郎「なんだ!? コントロールを取られたら……」

流真「もちろん、効果を無効に出来ない。」

俺は君の場の「ナチュル・ビースト」のコントロールを奪う。「イシュタムの投げキッスがビーストに当たつた瞬間ビーストは何かに導かれるかのように流真の場に移った。」

流真「さあこれで魔法の方は無効にされない。」

手札から魔法カード「墮天使の追放」を発動!!」

柳太郎「クソ…… 無効に出来ない……」

流真「「墮天使の追放」の効果によりデッキから墮天使カードをサチする。」

俺がサークルするには「墮天使 ルシフェル」

柳太郎「新しい墮天使…… 俺のビーストをリリースする気か!!」

流真「まあ見てなつて俺は手札から「墮天使の戒壇」を発動。」

これはさつき言つたから分かるな?」

墓地の墮天使モンスターを守備表示で特殊召喚する。

俺が特殊召喚するのは「墮天使 スペルビア」だ。」

柳太郎「こいつもライフ払う効果があるのか?」

流真「こいつにはないがこいつは墓地からの特殊召喚に成功した時墓地から天使族を特殊召喚するつていう効果を持つてあるんだ。」

柳太郎「何!? ジやあお前の場にまた攻撃力2000以上のモンスターが出てくるのか……」

流真「いや、残念ながら墓地から出すのは「墮天使 ユコバック」って言う攻撃力700のモンスターだ。」

柳太郎「700なんか大した戦力にならないだろう」

流真「まあまあ落ち着けて「墮天使 ユコバック」の効果発動。召喚、特殊召喚に成功した場合デッキから「墮天使」カードを墓地へ送ることができる。」

柳太郎「また効果を適用しようとするとんじやないだろうな」

流真「俺はデツキから『魅惑の墮天使』を墓地へ送る。

ちなみに言つてなかつたが、効果を適用する効果は相手のターンに使えるからな。」

柳太郎「じゃあ、俺が動いた時に…」

流真「そろそろモンスターならコントロールを奪う。

そつちの方が動きにくいだろうからね」

生徒3「キタねえぞ!! ちゃんと決闘しろ!!」

生徒1「そうよそうよ!!! 生徒相手にそんなことして楽しいの!!!」

周りがまた騒ぎ出した。

だがもう大半の生徒は察してしまつたのだろう、柳太郎が負けるとそうだ、流真はもう最後の仕上げに入ろうとしている。

流真「俺は『ナチュル・ビースト』と『墮天使 スペルビア』をリースしてアドバンス召喚『墮天使 ルシフェル』。」

柳太郎「攻撃力3000のモンスター… だが俺のライフはまだ尽きない!!!」

次のターン逆転の札を引く!!」

流真「残念ながら次はない、『墮天使 ルシフェル』の召喚時効果を発動。

相手の場の効果モンスターの数までデツキ、手札から『墮天使』モンスターを特殊召喚する。」

柳太郎「お、俺の場には効果モンスターは1体。」

流真「よつてデツキから『墮天使 テスカトリポカ』を特殊召喚!!」

柳太郎の場には攻撃力2500のモンスターが1体

それに比べ流真の場には3000のルシフェルと2600のマステイマ、2800のテスカトリポカまでいる。

さらにおまけだが700のユコバツクだつている。

リバースカードがない以上純粹に殴れば勝ちだか

流真はふと思つた、あの時の『手札抹殺』何を落としたのだろうともし予想が外れたら良かつたが予想通りだつたらめんどくさいと思つた。

流真「そいや、デュエルディスクつて相手の墓地の確認も出来た

よな？」

柳太郎「そうだけど何する気？」

流真「ちょっと見させて貰うぞ……なるほど

このままバトルフェイズ!!

「墮天使 ルシフェル」で「ナチュル・パルキオン」に攻撃!!」

柳太郎「うわああああああああああ

柳太郎 L40000—5000=3500

流真「さあどうする？

出すか？いるんだろう？「森の狩人イエロー・バブーン」が

柳太郎「バレてるならしようがない

俺は墓地の獣2枚を除外!!!出でよ！

「森の狩人 イエロー・バブーン」!!

流真「じやあ「墮天使 マステイマ」で相討ち」

イエロー・バブーンとマステイマがどつきあいをした後マステイマ
は天へ上りイエロー・バブーンは木になつた。

柳太郎「ちょうど3500か……たつた1ターンで終わらせられ
るって俺のプライドが許さんがプレイングの問題だろうな」

流真「いや、いい線いつてるぞ。

1ターンでのコンビを押ませられるとは久し振りにちょっとマ
ジになつた。」

柳太郎「ちょっとつて……次はボコボコにする！

まだ俺はお前の事を認めたわけではないからな!!」

流真「はいはい、わかつた

じやあ残りダイレクトアタック」

柳太郎 L3500—3500=0

生徒1「嘘でしょ……」

生徒3「あいつが負けた……」

流真がデュエルディスクからカードを抜いている時に流奈がなに
かを見つけた

流奈「お兄墓地にクリステイアがいる、かなり手を抜いてたんだね。

今度私もしてもらおうと」

柳太郎「テメエはこれからも俺の敵だ。
ライバルではない!!敵だ!!!それだけは覚えておけ!!」

そう言つて柳太郎はアリーナを出て行つた

流真「ふうん。ライバルではなく敵ね」

「おい、お前ら!」

流真がアリーナにいる生徒に声をかけると半数以上の生徒が動き
を止めたが中には流真の事が気に入らなくて帰つたものもいた。

流真「なぜこの学校に来た?」

これは俺からの宿題だ。返答によつては授業をしてやらんことも
ない。

俺は今から用があつて今日はいなが、明日からふざけた思想は俺
が捨ててやる。

わかつたやつから教室に戻れ!!

じゃあ返答を待つてる。」

そう言つてアリーナから出て行つた。